

詩歌合

文

一番 野外秋望

九

重輔

迢々秋色盡難成 蔓草寒煙鎖故城
殘雨半含西港日 野多樵牧少人行

右

近衛局

ひさし秋まのりてそめて音も向かぬけ小く秋風をう
詩所合とてふりの上右ととるんととるしは
さうらうらも中比建仁乃折段のみみ紙ありに
むら先傳はええの上白うれんさうとかよのほ
くもしあうるまじり大和と秋神乃まは先
あふみらるるによりてけいふよけいある人あま
とすまじりまふいもくさうくかろれあかんさういと
原そまじりまじりけいなるゆへも韻とてき聲とる



半信半疑のいささけある風ありと云ふは
皇子乃の賦を伝ふりしより詞人女子の風と云ふ
地ををつまなく氏業一きといひしより
それらち弘信乃清乃乃かか人をとるや
為學の儒士と云ふことし
あみらと志のさつたさをとるね諸を
いれ、え和れしよりよりけりよや白果
う待乃時本さうりなりなることなり
しけおりの辨日と云ふやまこと
と女をく我日域乃信成化せしと云ふ
白と傳ふるありのいささけ
誠とせりしよりその旨と云ふ
信なる諸作なる意とのことすや

皇朝御製



むし乃時いささけある風ありと云ふは
皇子乃の賦を伝ふりしより詞人女子の風と云ふ
地ををつまなく氏業一きといひしより
それらち弘信乃清乃乃かか人をとるや
為學の儒士と云ふことし
あみらと志のさつたさをとるね諸を
いれ、え和れしよりよりけりよや白果
う待乃時本さうりなりなることなり
しけおりの辨日と云ふやまこと
と女をく我日域乃信成化せしと云ふ
白と傳ふるありのいささけ
誠とせりしよりその旨と云ふ
信なる諸作なる意とのことすや

渺荒方万里 雲天目伏搖
心竟何如又 秋風吹乃
さやもり 風情いづく
うそく 心くろりみち
乃うら ぬいゆらんや
や 杉見こころはゆらん

四番

九

俊秀約片

斜日村春秋色濃
詩情不減留春好

回頭野外屢臨風
處々楓林霜葉紅

右

雅親胡片

そんれいりかあすそく
た先三句あま書山乃
と乃たのこま秋可禁乃
古風と思へり晴へ

み番

九

教秀

野亭一壑景無邊
眼界秋光多所適

鴉背夕陽疎樹煙
冥囊裏底幾詩篇

右

為季約片

いつくともみも葉葉れ
あまも葉葉乃とゆら
ゆら鴉背夕陽疎樹煙
あまの代も晴へ

六番

九

業志真人

杖藜杖我出柴扉
秦樹城邊天共遠

野草秋深露洒衣
回首一雁入雲花

右

季春

むさし野やあそむる秋草に雲さくはる末城
た乃曰七たれぬ七野あかともりふ成はるゆ
思ふせり但さる人うはる末乃を母さる野風を
さる事あはれさるのこ葉はゆりさるさるやた
秦樹城邊天共遠といふ身は野田の白屋に居
あはる眼は親園は青き成のそむいさるさる
さるやゆらん

七青

内大臣

醉帽吟筇一望寬

蕭條野逕覺秋闌

九

汀烟新處蘆花白

村雨殘邊楓葉丹

右

通淳和

あはるさるいさる河をれ乃さるさるさるさる
た乃後聽唐詩紙をたるをゆり許なると
海の霧はさるさるさるや中ゆらんたさるにさる
さるさるさる何さるりれりさるや思さる何ゆさる
汀煙村ぬんとさるおほえゆりや

八番

九

経清

秋聲秋久易黄昏
望眼轉迷平野外

一陳霜鴻落遠村
疎櫂細草侵吟魂

右

為安

野色りや花乃あはるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

さたの二首野外の秋と詠むる乃と母のあり
霜降草虫乃秋声と云ふあはれと云いつと海より
つはたはとせりといふ事だしくらとを

九番

教房

山光野々帯秋陰 蘭悴菊衰首不禁
满目蕭條霜露底 斜陽暖處草虫吟

右

雅永輝

乃と云ふにあらんやこりり香をよむ小鹿妻と云ふ乃と云ふ

九露下草虫詠殘陽暖處兮續切々之吟右聲

中野麻感落暮時節兮求啣之友不翅秋色之

深眼又知秋色之新腸事雖多端下謂同科

十番

左

定益朝臣

野外望中月上時 閑後吟杖步遲々

青山處々秋風暮 回首猶看天一涯

右

持為初臣

杞菊く山乃をそ乃より乃の或の茶をそいで再のそん

三五同の側影をいさくらよへし事とこをとりきりれ

らる字を平發又膽を怨を相やらやつといひゆりハ

皆又側声よりゆり玉天渡る天畔一方に後居也

或故人の所居るゆり之或舊里之所在る思之今之

其由而頻回首事非之其類者哉又山乃をそれ

よりゆりハ乃の流る中しゆゆりに風とて時

とと中ゆりて表れんゆりハとてゆりつらとて是

ゆりゆりハとてゆりハとてゆりハとてゆりハとて

いふらんはゆきをいかに好月へさすかあはれを
やめあすへておとしん

十一番

丸

親長

霧雲相簇辺斜陽 野外登臨秋凉傷
叻廉吟養情更切 孤村楓樹幾新霜

右

有俊和臣

いふらんはゆきをいかに好月へさすかあはれを
た紀夕輝物ふとくまてゆりたつりぬささのふ
又字も優なりさうまほりりた日月乃二篇は蘇速
盧乃半腹し居して天天下とてさびのなるうけ
もそかきくはんといゆりき心化しゆりお
久して月乃光少しとゆりて時まともあ紀ふとくは

もそかきくはんといゆりき心化しゆりお
久して月乃光少しとゆりて時まともあ紀ふとくは

十二番

丸

中原康富

遠野望迷烟霭中 長吟支杖倚秋風
不知何處孤村樹 山外斜陽錦繡紅

右

定衡法師

さかしのつぎのむねをかくまをまよとみぬ者の月
丸村樹之斜日斜晒紅錦右野徑之沙月似浦
白露彼者倚藤之格也此者幽玄之思何なり但
吟杖倚風之句法もさうまほりりた日月乃二篇は蘇速
きりしよの記もさうまほりりた日月乃二篇は蘇速
あす一得一失非勝也方

十二番

仙家見菊

九

前内大臣

山中物色怪蓬萊

冒雨黄花點々開

風卉似待白衣來

右

禪信

予記少知ふしきく流れ秋乃菊をきぬ多かみ世や多ぬん

怪蓬萊乃怪字とて不覺の字をくもくや多くもは

下句の陶漚の古事のものにして蓬萊物多と出され

如事あるをくもの多あやしみくもくもく本意もや

たういゆらんち新れよりのさく流れ秋をきとよんれ

十二の理運よりの流りこり秋のあつてさやうり

きとえはらん流新をよのゆきや山路乃事いおは

仙家くついなさくいさよ若異りりへさる事とては

十四番

九

九

教唐

秋深洞に撥英來

色似桃花無教開

準擬瑤地千壽宴

庭浮王母紫霞盃

右

雅親朝臣

仙人もいひつう(きん)つひのゆきまよふ流をさみぬぬ

九詩桃記菊ハ史正志ハ菊譜ハ雜文乃中に出

ゆきと多れを桃記乃まへりゆき瑤池宴ハおも

流れて王母の酒盃まよふ人事をとらんといふて

ちけ神いまこみえゆぬまや右新山路ぬく

乃夢のゆきを如ららるるれゆけ歌よこりては

む相苗やる如奇もや但らつ流やさく人ぬぬ

ふりぬれゆく暇ありと菊はくくしてふりぬれゆく
るれぬれあかしくありとこれぬれゆくして仙人乃くへ
きんきんとさうふへさうふりさうとやいゆふ代は
るぬれゆくしてゆてこそよの臺中乃天地とくし
橋裏よ山河とこそよそ千細代一念よ橋よ花
をす日よとくろあ乃回のよとさうりさあふれゆく
これいさうぬれ乃勝よやゆらん

十六番

経清

仙人愛菊白雲卿

洞裏秋風滿架香

應是延齡千歲種

下流自此及南陽

十四右

通淳

そらぬれぬれ神とあやそよふゆぬ菊のほのむらりよ

白雲卿ハ菊ハあも映してあはくゆきとあから座
あはくゆきとあから座下流自此及南陽といひお
りせゆり又そらぬれぬれ乃神の流門のむられ流
伝れおたれ証をくあひゆれたれきこくゆき
光りあはくゆきとあから座下流自此及南陽乃
下流よこれ仙衣とあから座下流自此及南陽乃
ゆへん

十六番

重補

一飲菊潭秋浸霞

随流忽到地仙家

風霜還恐芥柯爛

不為看暮為見花

大

雅永

仙人乃跡心ゆくゆ橋よとあはくゆきとあから座
下流自此及南陽といひおりせゆり又そらぬれぬれ乃神の流門のむられ流
伝れおたれ証をくあひゆれたれきこくゆき
光りあはくゆきとあから座下流自此及南陽乃
下流よこれ仙衣とあから座下流自此及南陽乃
ゆへん

たまたまの爛灯乃故事と詠をうたうて二十八字
を例乃付とありて詠のまじり殊なる風情も傳
ぬるへんやとありてぬえと流けらるる詠
ついで志乃の神と云えりて是れたのりへんや
たまたまや

十七番

た

内六句

玉華繁々満仙庭
幽賞不知秋幾度

雪秋氷姿晚節馨
一繁聞説制類齡

右

資廣口

玉のこりも又のそふや人乃もみうとありて
た詩玉華雪秋氷姿をてしそはやうなる事
なりてと云ふは詠のまじりたのりへんやと

ゆり瑤草琪樹をのりてやゆらんきくれ花とい
ふにこころも紫もものこころも
春輝くわたりてるへんやにきくれし
わたりてなくそはのりてやゆらんや
たをせぬ秋乃久しうるるるるるるるるる
たれくまれば是れ右勝へんや

十八番

た

業忠其人

洞門深鎖菊花鮮
白々黄々何所似

一種秋香属地山
雲園鶴護半羅前

右

持為船長

神くははれつとさも志くはあひやうつを秋の人
た舟のりてはれぬ字とていさうけりてくまると詠

はらけつとふもさくさくはみゆひやうもかたあ
うもゆりや雲圍鶴護半羅前、は又もさくさく
ゆきはいつもさくさくかたあや

十九番

九日賞遊仙子家
一枝聊插滿頭

菊籬風露十分加
去可作人間不老花

右

近衛

小のえはともあつてはさくさく秋乃花の枝と
一枝と海以挿む事、いと見えゆきみむ
さくさくゆりや雲圍鶴護半羅前、は又もさくさく
ゆきはいつもさくさくかたあや

十九番

右

俊秀朝臣

一叢黃菊數枝馨
權見寒英傲奇色
縹緲仙居秋滿庭
鳥君欲好別顏齡
為富

をゆえともあつてはさくさく秋乃花の枝と

九日賞遊仙子家
一枝聊插滿頭
菊籬風露十分加
去可作人間不老花

廿一番

右

中原康富

始々黃菊弄秋光
洞裏神仙却老方
花別顏齡令滿地
又知耳谷在南陽

右

有後物伝

をのゝえ乃く侍りたりや志す事此花をあるは世を今して
左金波地乃三字の事たるたう何くもきえ侍りたる
謬入他家為半日容しふんやいさう海より
まや侍らん

九二番

左

親長

紫艷半開秋光斜
佳辰好備群賢宴

叢生冒雨地仙家
霜傑鋪金羅脚花

右

定衡法師

五人乃をあらし尊れけり此切をくみ代乃新と契らん
左代は乃家一群賢此宴とひいさ太山人は栖
小の年此契とむくまふとりりいひつてきこえ

九三番

左

定通胡臣

仙地菊苗花正開
從今籬畔皇陽後

金英点々見奇哉
戲蝶遊蜂更不來

右

為季朝臣

やまの人乃たいせぬあちきりし秋もふとせぬるき花

仙地菊苗とちりりいいてい他家乃公あとなは

たうくまや菊苗と花乃開んるも早速なる

まや侍らん又そくくくういふもふとつる院

りこりといれ侍らんやり承和の黄菊にとり

ていふ人乃たいせぬあちきりし秋もふとせぬるき花

るく侍らん又そくくくういふもふとつる院

九四番

九

隱逸之姿仙砌秋
籬邊分得南陽水

金英王葉露香浮
朱々好醫衰疾憂

李妻

心ゆくも久しき乃多岐のやみおせけけし下
九菊の花を隠逸也といふ家茂叔と云ふ
た老らくぬんとちりせはとありおさなう奇と
とわりいつまひ心ちりせきとえゆまて疾
憂といふ家茂叔と云ふ家茂叔と云ふ
さなう奇と云ふ家茂叔と云ふ
お陽乃さく水みしうさあさう年らてゆ
かきあさうさく水みしうさあさう年らてゆ

九五番

九

屋有青松膝有琴
清風自續離鸞曲

内大臣

半梢落月夜沉々
下指何勞絃上音

右

雅水

青海乃波のをきけて引琴にうみなりれ松風を
お屋背ま松膝有琴こころより落月よりの
てきわくとそのこととらきとらきとらきとらきと
けくまて古介れと集あしりあをきてる柳を
海波乃曲ハ筆にこそ竹葉とてれ琴にいとヤ
こころやゆらんさねととヤまてあれみらよこそ筆
おし琴よのりけめととヤまてあれみらよこそ筆
つひあつととヤまてあれみらよこそ筆

なる程くや竹人うたふたふと傳うらにつくく勝
芳哉十々や竹人

二十六番

九

親長

松入焦桐雅操清
知音誰効鐘期趣

冷然洗耳玉徵声
古意一彈山月明

右

雅款躬長

わりのわりの秋乃まの松をせとま代とらふの福をわね
九松入焦桐四字の遠語りささしつら
い出さし竹まも風も空も竹もていさ
わもまもや竹もへ太初又字すしあつ松操乃祥
まやゆらららその福もこのあつらりあわさ
まれおもへけりささしつらしつらて祈りまもまもつと

や中

九七番

九

百尺烟梢洞懸陰
曲中別鶴難分處

清風吹落夜沉沉
何是松聲何是琴

右

季春

松風乃く名くむくくわの紫もきくほやあよあまめん
を身四句みくくわて野乃高代あつまさん竹あ
まらにいもきさけらるや但まもよなりてあつあ
津もあつあつみくくわをたあ代乃あも松風をひき
よもこれ竹もて琴れ祝言わかつらあつあつあつ
へく持も中代

九八番

重補

下指松聲絃上傳

似剛別鶴更無眠

持為朝臣

松聲絃指又北絃

右

此曲虛堂明月夜

松風をうつらぬ音はさうり月まじりたるの松凡

九前懸又同字乃其出たる詞きこまをこころ

さくせうてはあまりによしあしと成り中待

古律乃辨よこそわが内事も竹うたはたの

音は志し一白若乃調和者寡しやたは下に

まけ竹ぬへ

業志志人

不勞下指趣む深

松抄風生入古琴

右

如今四海知音少

獨評紫桑處々心

右

孫信

とくはむれむ乃をこよの志しとていふれり是れ松凡

凡賢人天子れ道ハ知音と得たりて得たりと

ま今の世こそし知音ありし時ハ藝簡殊編中

うむしひて千載乃人と友として一付乃懐を

やうもこそ侍の意えよのつねの事なれとさう

みの一句感慨きりしとて別れをもちりたる可

秘み文字のまらしむ約ときこえ竹り又訪交

如清乃よみ後つる句に句約つるもさうり

竹ぬえや是とありとやせえ古介とさうり

似これハ志しとて竹りまらとや

三十書

九

知音誰與子期同
贏得松風在簷外

教秀

勝上時換罽下桐
聲々次入七絃中

右

通厚

かげなりの松乃風うらひきこてかきぬよのまじり
太奇乃平頭病守合ふ少くうらひ半の
とかりこ難うは侍ぬよそのとうけあひく
あし申然あけきこまきこく侍も常下にまはす
法けゆらんといふことおかしううた乃侍とてし
さまたの秀迷うゆ福ささく又月科とや
中へらん

二十一番

九

定兼

溪邊緩歩宿松陰
流水高山曲終後

永夜無入彈玉琴
微風陳々入清音

右

資廣

此のたのめりあつへは如ふじわやにち記松月巻
九二十八字太二十一字和漢雜殊勝芳是周

卅二番

九

面瑤琴下指避
高山流水至今古

中京康夏
松風為入五絃吹
未必知音許子期

右

為留

おのれと朝の松とわなまをくねりあつへは秋風たの
あふは経の床の琴とや文武の二絃とて後
七絃とていふは山流あり泊牙琴の六絃

絃操乃操之琴操之義也 乃乃 例聲
よてしや 乃乃 先太れよのねと 幸のふりあり
天 乃乃 安い 乃乃 乃乃

此六番 乃乃 乃乃 乃乃

教唐口

古松遠屋度秋風 一曲賞音焦尾桐
清夜沉々吹入指 無弦都在有弦中

近衛

この福乃々々ぬあをせれありはやかしのあわらぬの
九焦尾桐蔡筵 琴もてに身にみらゆら太
所并七番乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃
乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃
有餘地所 筆 蕪 詞 云

乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃
乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃

乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃

乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃

乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃

乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃

108
647
175

7

5

本一冊者物許由小珠編充の長布也
不而して今書家あり者也

定安九年三月廿四日

九野林乃烟

